

『リストラとワークシェアリング』

(岩波新書、2003年4月)

経済学部教授 熊 沢 誠

このところ8年ほど、私は岩波新書という媒体をつかって現代日本の労働の状況を批判的に分析する仕事を続けてきたが、「高齢者」のなかま入りをした2003年4月、既刊の『能力主義と企業社会』『女性労働と企業社会』に引き続いて、どうにか本書『リストラとワークシェアリング』を刊行することができた。晩年(?)の仕事で、「岩波新書三部作」としてひとまずまとまりはつけたことになる。

今回の本の大まかな筋はとくにわかりやすいと、なじみの読者にはよく言われる。現時点の日本で働く人びとには四つの重い現実がのしかかっている。深刻な失業、リストラの横行、サービス残業をふくんでときに週60時間以上にもなる長時間労働、そして増える一方のフリーターや非正規労働者へのまことに劣悪な待遇である。とくに人が減らされるぶん労働時間が長くなる、リストラと働きすぎの共存など、状況はグロテスクでさえある。

ではどうすればよいのか。フルタイムの労働時間を短くしてより多くの人が雇われるようにすべきだ。これを<一律型ワークシェア>と呼ぶ。また、私たちは人生のそれぞれの段階で、どうしても育児、介護、療養、勉強などのため仕事の時間を割かねばならない。そのニーズを満たすためには、フルタイム勤務とパート勤務の間を往還できるように、そしてパート勤務の時もそれなりに生活はできるほどに非正規雇用の待遇を改善する必要があるだろう。これを<個人選択型ワークシェア>と言う。この二形態の営みをなんとかつくりあげたい。

そんなメッセージを込めたこの本は、それゆえにこそ、まずもって四つの「労働の現実」が労働者にもたらすしんどさを細かく具体的に描き出すことに多くのページを割いている。次にそのうえで、多くの人々が支持しうる上のような

ワークシェアリングの実践が、なぜこの日本でははかばかしくないのかを立ち入って分析する。困難を直視しない理想論は無意味だからだ。とはいえ、困難を凝視した上でなおワークシェアリングという「希望」に、労働について、もしあるとすればほとんど唯一のものにみえるこのような「希望」に立ち返ってしまふ少なくともなができるかを探ることは、大きな心労を伴う作業だった。実際、書き終わった2003年冬、私は新聞の20行記事も無視しないような現状分析はもうできないと思うほどに疲れていた。その疲れに、今度は傲慢なアメリカのイラク侵略、日本政府のアメリカに対するいそいそとした追従、そしてすべてがうわすべりな小泉政権の言辞をゆるすほどに脆弱な日本の社会運動——そんなもうひとつの現実を見なければならぬいらいだちが加わって、私の2003年は気力いまひとつだった。

『リストラとワークシェアリング』は11月に版を重ねた。この本の部数はさほどではないが「三部作」すべてでは15万部を超える。甲南大学での私の講義内容はこの「三部作」と大きく重なっているので、発行部数のいくぶんかは私の学生たちによるものだろう。

どちらかといえば職場での仕事のしんどさを語ることの多い私の本は、就職を控えた学生たちをいったんは暗い気持ちにさせるかもしれない。けれども、講義や読書の後、知らねばならないことをはじめて学んだ気がする、これからの仕事について暗い現実をよくわかってこそしっかり対処できるのだと思う...など伝えてくれる学生もいて、元気に恵まれる。今までもそうだったけれど、あとわずかながらこれからも、彼ら、彼女らの職場体験をこそ文字にしてゆきたいと思う。